幼馴染はお嬢様

ペンペンさん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
幼馴染はお嬢様

【Ｎコード】
Ｎ１０２２Ｋ

【作者名】
ペンペンさん

【あらすじ】
これは、幼馴染で金持ちで美人といういかにもエロゲーで出てきそうなキャラの柊　楓だが、門松　クロをいじめることに生きがいを持っている
そんな話です。

その1

俺には幼馴染がいる。
さらに、世界一の大手　柊カンパニーの娘だ。
さらに、美人だ。髪はロングで黒髪で顔は整っていて告白された回数は覚えていないという。

そんな　エロゲーで出てきそうな幼馴染　柊　楓と俺　門松　クロの物語だ。

俺の朝は、早い５時３０分には、起きている。そのわけは、

「おい、起きろ高校生にもなって人に起こされんの恥ずかしくないんか。」

「うるさい。私を起こしたかったらそこで土下座して崇めろ。」

「お前を崇めるぐらいならおれの家のしゃもじを拝むわ。つうか早く起きろパンツ脱がすぞ。」

腹に重たい拳が突き刺さった。

「ぐはっ！！」

楓の頬は赤く染まっていた。

「変態！！出てけ！！！」

俺の朝が早い理由は、幼馴染の楓を起こすためである。

普通、逆じゃない？俺の持っているゲームは起こされることがあっても起こすことないもん。

そんでもって幼馴染キャラは絶対やさしいのに・・・

その１（後書き）

これからもよろしくお願いします

その2　冬木　唯

俺がいつも早く起きても家を出るのが8時5分になってしまう。
ちくしょうこれも全部、楓のせいだ！
なんて声に出したら音速の壁を越えた右ストレートが俺の腹に容赦なく突き刺さるのでいえない。
不幸な話だ。

俺の通う高校　志野高　は、はっきり言ってバカの集まりだ。
なんで俺がこんなバカ高に通っているのかは、バカだからだ。自分で言っていて悲しくなる。
まあ俺はこの高校に通う理由はわかる。だが、なんで楓がこの高校に通っているのかわからない。
あいつたしか中学に時いつもベスト3にはいっていたのになんでここに通う理由がわからない。
志野高始まって以来の秀才と聞く。一人で志野高の偏差値を上げたといわれている。

なんでこんなことを言っているのかと言うと、早い話全校生徒からひいきされている。
先生からもひいきされている。
遅刻しても何にも言われない。

だが、俺は全校生徒や先生からみると普通の生徒なので遅刻したらクラスの前で正座される。
現在進行形で・・・。

「お前はいいよな・・。誰にも文句言われないで堂々と遅刻出来るもんな。」

「だったらクロも死に物狂いで勉強してつうか死んで私の足元這いつくばってなさい。」

「今の言葉で俺のガラスの心は砕け散って悲惨なことになってるよ。」

「・・・楓。・・あんまりクロ虐めてはダメ。」

「冬木様！！ありがとうございます。その言葉だけで生きていける気がします。」

そこに立っていたのは、中学からの友達（俺の心のオアシス）　冬木　唯　だ。
基本、無口だけどとてもいい人でなんといってもきゃわいい！！！！！！！
整った顔立ち。
ちょっとつり目で、小顔で、カールのかかったショートヘアー。
なぜか髪が銀髪なのかは知らないけど、とっても似合っていて。
身長も俺の好みの俺の肩まで（１５６ｃｍ）で、・・・・・・。
まあ、冬木さんのことを褒めてたらその日一日が終わってしまう。

「いいの。クロは私のために生まれてきて私のために死ぬのだから。」

誰がお前のために生まれて死ぬか！！
冬木さんなんか言ってやって！そして、臆病な俺を許して。
「・・・そうなの？」
え！そんなわけないですよ。
「そうよ。実はこんなことされてクロ喜んでいるの。」
誰が喜ぶか！！俺はMじゃない！！！
「え！・・・・そうなの。」
「ち、違うよ。冬木様俺はMじゃないんだ。」
だからそんな悲しい目で見ないで！
「・・・クロが喜ぶなら私・・・」
「え！何、俺が喜ぶなら何！？」
「アホなことしてないで次の授業始まるよ。」
お前がもちこんだ話じゃないか！！

その2　冬木　唯（後書き）

これからサブタイトル書きたいと思います。

その3　高橋　勝

「そういえば、今日勝の奴来てねえな。楓知らない？」

勝とは、俺の親友言う名のただのバカだ。確か本名は、高橋　勝だったような気がする。まあ、そんぐらいのどうでもいい奴だ。

「なんで私があんなバカのこと知ってるのよ！」

「いや、なんとなく。お前ら心の中でつなが…っ！！！」

女の子にフランケンシュタイナーかけられた。いやこいつに女の子という認識してはいけない。

「痛って！！！！！お前なんて技かけるんだ。下がコンクリートだったら死んでるぞ！！！！！」

「・・・大丈夫？」

「・・あ。冬木様。お、俺はもうダメだ。最後はあなたの胸の中で眠らせてください。それと、あの怪物、退治しといてください。」

「誰が怪物だ！」

さらに追い打ちをかけ、俺の腹部にかかと落としか落ちた。

「・・・楓。ダメ。」

「わかった。でもそこのバカ唯の胸に触れてるよ。」

え！もしかして頭にある感触って冬木の胸！！！！

「・・・え。ええ！」

「わ、わ。ごめんなさい悪気はなかったのです。この通り許してください。」

俺は速攻で土下座をした。冬木の方を見てみると頬を染めていた。めちゃくちゃレアな顔だ。さらに、冬木の胸に触れて顔がにやけてしまう。

「ぐは！！」

頭が楓の脚で踏まれている。屈辱的だが今は何も言えない。

「気持悪いんだよ。にやけて、あんたって巨乳好きだったなんてね。」

「ああ。お前の貧乳より大きい方が好きだ。」

実は冬木様はけっこうな胸をしていらっしゃる。それにて対して楓は、とても残念な胸をしている。

「ぐは！！これ以上力加えないでください。」

「うるさい！！乙女の心傷つけた報いよ。」

「ぎゃあああぁぁぁぁぁ！！！！！！」

今俺は勝の家に向かっている。まあ、俗にいうお見舞いだ。
あれから俺は冬木様の説得で何とか地獄から抜け出したが、クラスの男子に袋にされた。
あいつら楓と冬木のファンだったのか。
高橋宅についてチャイムを鳴らすと
「待ちわびたぜ。俺の楓ちゃんと唯ちゃん！！」
ドアが開いたと同時にこんなことを言いだした。誰がお前の唯ちゃんだ。俺のものだ。
「よお。勝、元気だったか。」
「え！お前だけかよ最低でも楓ちゃんとお前一緒に帰っているのに。」
そう俺と楓はいつも一緒に帰っている。まあ、お隣さんという理由もあるけどあいつは、俺を荷物持ちにしているだけだ。だから、付き合ってもいないのに一緒に帰っている。ついでに冬木様も途中まで一緒だここは楓に感謝している。冬木さんの親友が楓でよかったと思える。
「ああ。勝の家に行くって言ったら先に帰りやがった。」
「じゃあ親友、お前も帰っていいぞ。楓ちゃんと一緒にいないお前

に価値はない。」

「おいそれが親友にかける言葉か！！」

「しょうがない。まあ、あがれ。」

「いや、いいプリント渡したら帰る。晩の仕度しないといけないし。」

「じゃあ先に言えよ！！」

その3　高橋　勝（後書き）

文才が欲しい。。。。。。

話のエピソードなど載せてほしいのがあったら言ってください。

出来ればコメントしてくれたら嬉しいです。

その3　門松　美羽

「ただいま。」

「おかえり、お兄ちゃん。」

「おお。我が愛しの妹よ。兄の迎えに来てくれたのか。兄は嬉しいぞ。」

「黙れバカ兄。さっさとご飯作れ！」

「・・はい。」

俺の家は妹の美羽と二人暮らしだ。
親は小さい時に交通事故で死んでいてずっと二人で住んでいる。
中学2年でしっかりしていてもてるらしいが、美羽は楓の影響を受けて俺に対して厳しい。まあ、俺の責任の部分もあるけど。

「美羽！！ごはん出来たから楓呼んできて！！」

なぜ楓も呼ぶかというと、楓の両親はお偉いさんのため家にいることはめったにない。だから、門松家でご飯を食べている。
あいつ金持ちだから料理人雇うか出前頼むかにおすればいいのに、と言ったら黙れと言われた。

「クロ今日何？」

「ピーマンの肉詰めだ。」

「お兄ちゃん、私がピーマン苦手なの知ってて作ったでしょう！！」

「私もあまり好きじゃない。」

「いいから食べろ。もしかしたら胸が大きくなるかも知れないだろ？」

ドス！！ミシミシ！！！

俺の顔面と鳩尾に勢いよくパンチが入った。

「あんた、まだ懲りてないみたいね。今日、注意したばかりじゃない。」

「お兄ちゃん、人には触れてはいけないものがあるの。」

「待って、今のパンチで骨が軋む音がした。今はやばいって！本当にやばいって！！」

おかしい顔面と鳩尾だけ殴られたのに、体のあちこちが痛い。なんでだよ、どんな技使ったらこうなるんだよ！

「何だ折れてなかったの？じゃあもう少し強く殴らないといけないね。ねえ、美羽ちゃん。」

「ええ、楓おねえちゃん。どうせお兄ちゃんの体だし私たちが遊ぶために存在する分際で歯向かうのがいけないのよお兄ちゃん。」

「美羽楓と同じこと言ってるよ。つうか俺の人権は生きる権利は！？」

「そんなのは当の昔に私がもらったわ。」

「私はお兄ちゃんの自由の権利をもらったの。これは、楓おねえちゃんと決めたことだから。」

「そんなの人間じゃないじゃん！！もう奴隷じゃん！！！」

「今頃気付いたの？今日はもう唯がいないから朝までたっぷり遊べるね。」

「お、お許しを！！！！」

「「問答無用！！！」」

朝起きたら楓の家の牢屋らしい部屋（昔よく楓に閉じ込められた部屋）にいてなぜか俺は両手足共に鎖で結ばれていてなぜか楓と美羽がとなりで寝ていてなぜか体のあちこちが痛い。
体には無数のあざや爪でひっかいたような跡がある。
昨日の事を思い出そうとすると昨日の晩御飯あたりから思い出せない。

「ん、んん。おはようお兄ちゃん。・・・・・・！！」

あれ？なんで美羽、頬が赤くなったの？

「はあ～。おはようクロ・・・・・・！！！」

あれ？なんで楓も頬が赤くなってんの？

「ああ、おはよう二人とも。なあ昨日の事覚えてないんだけどなんかあったの？」

「「なんにもなかったよ！！」」

「いやなんかあったんだろ。じゃないと俺がこんな状態で起きないよ。」

「何にもなかったてば！早く朝ご飯にしようよ。」

「そうそう何にもなかった。」

「いや何があったんだよ！！！！！！」

その3　門松　美羽（後書き）

ナンニモナカッタヨ。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1022k/

幼馴染はお嬢様

2010年10月25日06時36分発行